

Title	安元稔君学位授与報告
Sub Title	
Author	安元, 稔
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1982
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.75, No.6 (1982. 12) ,p.109- 112
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学位授与報告
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19821201-0109">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19821201-0109</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



## 安元 稔君学位授与報告

報告番号 甲第647号  
学位の種類 経済学博士  
授与の年月日 昭和57年3月30日  
学位論文題名 「近代英国の歴史人口学的研究」

### 内容の要旨

近代英国における経済発展を人口に焦点を合わせつつ分析することが本論文の主要な目的である。人口史あるいは最近では独立した学問領域として市民権を獲得しつつある歴史人口学(historical demography)とは、人口学的な側面からみた個人・家族の生活史を歴史的なパースペクティブの中でとらえ、われわれの歴史像をより具体的・客観的かつ豊富にすることを指すものである。ほぼ16世紀中期以降、本格的な工業化の開始に至るまでの前工業化あるいは、原基的工業化(proto-industrialization)期の人口史研究は、ヨーロッパにおいては、フランスおよびイギリスを中心に、第二次大戦以降、史料収集の系統化・組織化・研究方法の精緻化が進み、これに伴ってかつて予想もなかったような次元の精度の高い、しかも多様な人口動態統計を得ることが可能となった。

歴史人口学そのものは、なお発展途上の学問領域ではあるけれども、例えば科学的批判に耐え得るデータに裏うちされているという経験科学がそなえていなければならない重要な要件を既に充分果たしており、われわれがこの領域から学ぶ点は少なくない。教区簿冊(parish registers)を史料として用いる家族復元(Family Reconstitution)分析をはじめとして、前工業化時代のヨーロッパの人口分析には有力な研究方法を適用した優れた個別研究が外数蓄積されて来た現在では、このような研究方法の成果を積極的に社会経済史研究に採り入れ、歴史人口学と狭義の社会経済史の結合を図ることは、少なからぬ意味をもっているものと思われる。

本論文は、このような問題意識に立って、主として16世紀中期から19世紀中期に至る間のイングランドを対象として、人口と経済発展との具体的な相互規定関係を実証的に分析しようとするものであって、その構成は以下の通りである。本論文は、大別して、第I部

歴史人口学——史料・方法・成果と課題、第II部 前工業化社会における人口と経済、第III部 工業化と人口、第IV部 メスリ教区家族復元結果(別冊統計附録)から成っている。第I部第1章は、家族復元分析を中心とする歴史人口学の方法の詳細と、その問題点および史料としての教区簿冊が、どの程度、現実の出生・結婚・死亡を反映したものであるのかという、ある意味では近代歴史人口学の根幹に関わる極めて重要な問題を様々な角度から検討したものである。第2章は、フランス・イギリスを中心として、最近に至るまでの歴史人口学の成果、特に社会経済史研究にとって意味があると思われるものを概観し、併せて今後の課題を展望したものである。

第II部は、三つの個別論文から構成されており、このうち第1章「人口よりみた中世デヴォンシャーのvillとborough」のみは、16世紀中期以前を対象としている。史料として、一般的な記述史料の他に、俗人臨時税賦課記録(Lay Subsidy)を用い、中世末期の農村と都市の人口規模を推定し、近代都市成立へ至る過程を俯瞰したものである。第2章は、16世紀後半以降の東南部イングランドのノリッジ市への大量の移民(低地地方の新教徒であるユグノー)の流入とそれを契機とするノリッジ市民の新しい工業技術の吸収、定着の過程を分析したものである。第3章は、ほぼ同じ時期の西南イングランドの中心的都市エクセターにおける都市工業と人口変動、就中、都市住民の階層構成を、俗人臨時税記録・兵員調査・炉税報告書(Hearth Tax Returns)・教区簿冊・人頭税報告書(Poll Tax Returns)等の史料から考察したものである。

第III部は、18世紀末期から19世紀初頭のいわゆる古典的産業革命期のイングランドにおける工業化と人口変動の相互関連を、地域史料研究の成果を摂取しつつ、二つの側面から分析したものである。先ず、第1章において、北部イングランド・ヨークシャーの工業地帯であるウエスト・ライディングの工業都市リーズ(Leeds)における都市人口の動向と工業化との相互規定関係、都市化の人口的側面に検討を加えたものである。次いで、第2章は、このリーズの近郊に位置し、農業および炭鉱業を主要な産業とする農村教区(Methley教区)の人口変動を、リーズの都市化・ウエスト・ライディング地方の工業化の進展という文脈の中でとらえ、リーズおよび周辺工業地帯への労働力供給源の一つとして教区の経済発展をとらえようとしたものである。第1章の都市人口の分析には、人口規模が大きす

ざるため、家族復元法を用いることは困難であったから、人口分析の史料としては教区簿冊・私的な人口調査・センサスをを用いた。他方、第2章の人口統計は、家族復元分析から得られたものである。これに教区の農業発展をうかがう農業労働者の賃金記録・地租賦課台帳・田賦関係諸史料・土地保有調査・教貧関係史料を用いている。

第IV部 メスリ教区家族復元結果は、本論文の第I部第1章、第III部第2章、その他の基礎データとなったものであるが、あまりに詳細にわたり、大部なものであるため、別冊として附録統計表として、一括してまとめた。1977年から1979年にかけて、Social Science Research Council (S. S. R. C.), Cambridge Group for the History of Population and Social Structure において、筆者が行なった研究の一部である。同研究グループの開発になるプログラムを用いて算出された家族復元結果であり、1560年から1812までのメスリ教区の結婚年齢・出産率・死亡率に関する諸指標および史料の検討を記録したものである。

#### 論文審査の要旨

##### 1. 論文の要旨

本論文は、中世末期から19世紀中期に至る間のイングランドを対象として、人口と経済の相互規定関係を実証的に分析しようとするものである。経済史研究に人口という要素を導入し、人口と経済の関係を歴史的に考察しようとする試みは、今までわが国の学界においては決して多いとはいえなかった。就中、ヨーロッパ経済史の領域においてはそのような傾向は顕著である。この点、欧米の学界には古くからある人口への強い関心と対照的であるといえよう。今日、欧米の学界で、人口史研究の隆盛を生むに至った関心は、国によって多様ではあるが、研究の蓄積は厩大で、とくに1950年代後半における、歴史人口学(historical demography)の成立以後、各国において人口を組み入れた経済史研究が進められている。歴史人口学は、それまで研究者が組織的には利用して来なかった教区記録(Parish register)——論文P. 20の次に写真あり——を史料とし、そこに記録されている洗礼、結婚、埋葬の記事から、出生・死亡・結婚に関する人口学的な指標を得る方法であるが、これによって、従来不可能視されて来た、近代センサス施行以前の社会について、教区を単位とした人口に関し、精密で信頼度の高い数値を得ることができるようになった。この方法は、1950年代後半、

フランスの国立人口研究所(INED)のLouis Henryらによって開発され、史料上の個人名をリンクさせ、一組の夫婦の結婚から消滅に至る間の行動を追跡調査するところから、家族復元法(Family Reconstitution)を基本としている。そしてこの方法はイギリスに渡り、今や全キリスト教世界で普く行われるようになった。

もとより、人口の史的研究の範囲は、教区記録制度の成立(たとえばイングランドでは1538年)以降に限られるわけでもなく、また、依拠すべき資料も多い。たとえば人頭税報告書、徴兵名簿等は中世末期にすでにあらわれ、近代に入れば徒弟奉公契約書、市民名簿、戸税台帳、結婚許可証、家系図等が出て来る。そして、19世紀に入れば、国勢調査が実施され、その原票が凍結期間をすぎて今や利用可能となってきた。

歴史人口学、あるいは人口史は、最近では、独立した学問領域となった感があるが、上述の史料を用い、これに人口学的な操作を加え、個人や家族、それらの集団の生活を歴史的な視野の中に据え、歴史像をより具体的に、豊富にさせるものである。その進展に伴い、かつて予想もしなかったほどの、精緻な諸人口統計を得ることができ、また、副産物として、庶民の識字率といった指標まで獲得可能となった。このような状況を踏まえて、われわれは、すぐれた先方研究業績から多くのものを学びると同時に、自分自身の手によって第一次史料を収集整理し、歴史人口学と経済史とを連結してみることにより、この時期の社会経済史研究をより充実させて行こうとするものである。

本論文の問題関心はほぼ上述の如きものであるが、具体的には本論文は以下のような構成から成っている。第I部 歴史人口学——史料・方法・成果と課題、第II部 前工業化社会における人口と経済、第III部 工業化と人口、第IV部(別冊統計附録)メスリ教区家族復元結果。

第I部第1章では、家族復元分析を中心とする歴史人口学の方法の内容を紹介し、その問題点、および史料としての教区記録を様々な角度から検討する。第2章は、フランス・イギリスを中心として、最近に至るまでの歴史人口学の成果、とくに社会経済史研究にとっての意味をサーベイし、この種の研究の今後進むべき方向を展望したものである。

第II部第1章は、16世紀中期以前を対象とし、デヴォンシャーのboroughを人口構成から取扱ったものである。一般的な記述史料の他に、人口規模を推定する史料として、14世紀の臨時税賦課記録を用いている。

中世末期の農村と都市の人口規模を比較し、近代都市成立に至る過程を俯瞰したものである。第2章は、16世紀後半、イングランド東南部の毛織物工業都市ノリッジに大量に流入した低地地方の新教徒ユグノーによる新種毛織物生産の技術移転を取扱っている。この移民は一時期、市の人口の3分の1を占めるほどにもなったが、ノリッジの住民が彼らから新しい工業技術を吸収すると同時に定着化させて行く過程を観察している。ついで第3章は、ほぼ同時期の西南イングランドの中心的な都市エクセターにおける都市手工業と人口変動、とくに都市住民の階層構成を多様な記録から再構成してみた。

本論文の中心ともいべき第Ⅲ部は、産業革命期のイングランドにおける工業化と人口変動の相互関係を、従来の地域史研究の成果を摂取しつつ2つの局面から分析したものである。第1章「産業革命期におけるリーズの都市化と人口」においては、北部イングランド、ヨークシャーの工業地帯であるウエスト・ライディングの都市リーズ (Leeds) における都市人口の動向と工業化の関係、人口増加と都市生活環境の悪化、死亡形態の変化を検討した。第2章は、慶大図書館蔵のヨークシャー教区記録 (刊本) を用い、リーズ近郊の農村教区の人口変動を、リーズの都市化の進展・教区周辺地域の工業化の展開との関連でとらえ、都市および周辺工業地帯への労働力供給源の一つとして農村教区の様相を追求したものである。この章で用いた方法は、さきに述べた家族復元分析で、そこから得られた諸人口統計に、土地、賃金、課税記録の整理結果を結びつけ、工業化開始時点における人口と経済との関連を探ったものである。

第Ⅳ部は、第Ⅲ部第2章で用いたメスリ (Methley) 教区の教区記録から、筆者自身が行った整理結果を、筆者の留学先であったケンブリッジ人口および社会構成史グループによって開発されたプログラムに乗せて作成した諸人口統計——大別して結婚、出生率、死亡率、記録の正確度の検定からなる——を表示したものである。

## 2. 論文の意義

本論文はヨーロッパを対象とした社会経済史におけるわが国最初の歴史人口学的方法をとり入れたアプローチであることを、まず挙げねばならない。しかも著者は、イングランドの先行研究を渉猟しながらも、一次史料にとり組み、長期間の努力をその整理分析に投

じ、貴重な発見を行っている。とくに、第Ⅲ部でえらんだ場処は、工業化に際して重要な役割を演じた地域であるにも拘わらず、イギリス人の手による研究もなかっただけに、その成果はイギリスでも高く評価されている。

また、著者は、歴史人口学と経済史の結合を模索し、人口の経済史とも称すべき研究領域の構築を試みているが、この点についても評価することができる。フランスにおいては、いわゆるアナル学派と呼ばれる人達に共通して、諸科学の統合によるある種の「全体史」構築の試みが続けられているが、イギリスにおいては、人口史と経済史の連結に関して十分の成功をおさめているとはいえない。そのような状況の下で、筆者がとくに第Ⅲ部で試みたような人口現象と経済的变化との関係を解明しようとする方向は十分意味のあるものといえるだろう。すなわち、産業革命期の人口変動と農業発展、都市化の波及、工業化の進展と新しい階層の人口の増加、雇用の動向と人口変動の関係等が注目される。いわば、イギリス産業革命研究に関して、いくつかの未知であった分野を開拓したといえる。

## 3. 論文の主要な成果

- (1) 第Ⅲ部第2章に関して階層別人口諸指標の相異を検出している。たとえば、農業労働者、炭坑夫、零細保有農では結婚年齢が低く、出生率は高い。
  - (2) 家族復元分析の結果と他の史料の観察結果をリンクさせ、年齢別の賃銀、所得を検出している。
  - (3) 都市と農村における雇用機会の違いを1851年センサス原票から検出し、労働力移動と結びつけて分析している。
  - (4) リーズという工業都市の人口を、教区記録・センサスその他から検討し、工業化と人口との関係を分析している。この際発見した識字率のデータは興味深い。(p.450)
- 以上4点は、すでに英文論文として発表され、イギリスにおいても一定の評価を与えられている。
- (5) 教区記録およびセンサス原票の史料批判を徹底的に行い、しばしば問題となる洗礼の脱漏率についても約9% (p.48) という具体的な測定を行っている。また、洗礼日と出生日の間隔についても、乳児の間に死亡した場合は、他の場合よりも短いという事実を見出している。(p.51)
  - (6) 中世のバウと呼ばれる定住地の住民構成について臨時税台帳からその人口規模を具体的に明らか

にしている。

- (7) 16・17世紀イングランドの都市(エクセター)毛織物工業の構造を、遺産目録等を通じて明らかにし、(p.347以下)都市住民の構成を諸史料から明らかとし、とくに貧困と死亡率の高さを実証している。(p.386)

#### 4. 論文の限界と今後の課題

- (1) 外国経済史研究という制約はあるとしても、地方的なレベルの分析にとどまらず、一国全体の動向との結びつきをさらに考慮する必要がある。
- (2) 第Ⅱ部と第Ⅲ部は、独立した論文とも言える。両者を結びつける努力が必要ではなからうか。
- (3) 人口と経済の関係についても、一局地での事例を一般化するのにやや性急さがみられる。長期・短期の別とか、E. リグリの言うフィードバック

ク作用等を考慮に入れる必要がある。

- (4) 論文の内容がどちらかという「伝統的」社会経済史的研究と人口学的研究とを含むだけに、提出論文のタイトルに内容を的確に示すよう再考すべき余地がある。

#### 5. 総合判定

以上いくつかの問題点があるとしても、それらの中には望蜀と言うべきものもあり、今後の筆者の研鑽によって十分解決可能であると信じられる。本論文の有する学問的価値はそう言った残された問題点を補ってなお余りあるものであり、本論文は経済学博士の学位を授与するに十分な内容を有するものと認める。

論文審査担当者 主査 中村勝己  
副査 速水融  
" 岡田泰男